人間文化 , vol.55, pp. 18-32 （2023）

『朝妻沖湖底遺跡』の調査成果と基礎的検討2

中川　永／石田雄士／森田　遥
豊橋市美術博物館・滋賀県立大学人間文化学研究科博士後期課程単位取得退学／
米原市教育委員会・滋賀県立大学人間文化学研究科博士前期課程修了／
千早赤阪村教育委員会・滋賀県立大学人間文化学部地域文化学科卒業

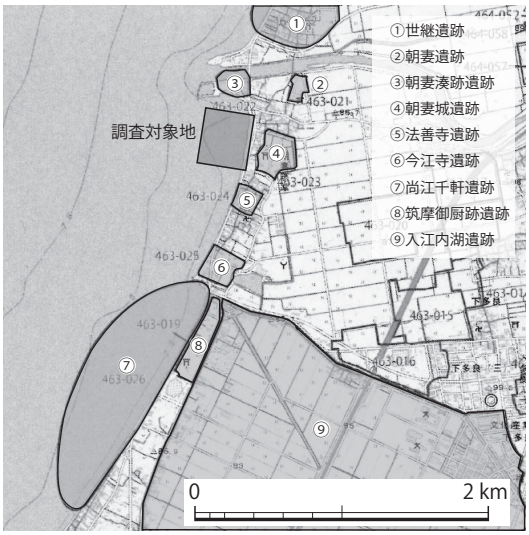
はじめに

本稿は米原市朝妻沖合での琵琶湖湖底遺跡の調査成果について報告を行うものである。当遺跡は埋蔵文化財包蔵地として周知されてはいないものの、滋賀県立大学林博通研究室（当時）により、『尚江千軒遺跡朝妻湊地区』として平成10年度から断続的な調査が実施されてきた〔滋賀県立大学林博通研究室2012〕。その後の調査は行われてこなかったものの、平成27年度から筆者らにより断続的な分布調査が行われ、古代から中世にかけての要港である朝妻湊との関係が推定される〔中川・大西2021〕。このことから、当調査区を仮に『朝妻沖湖底遺跡』と称し、米原市教育委員会と連携し、遺跡の広がりと性格の把握を目的とした分布調査を進めている。本稿では、令和４年度の調査成果報告を行うと共に、遺跡の性格について若干の検討を行いたい。

１．遺跡の立地

朝妻沖湖底遺跡は、滋賀県の北東部にあたる米原市の湖岸から湖底にかけて所在する。一帯は鈴鹿山脈の霊仙山を源とする天野川が形成した沖積地であり、遺跡の北側には天野川河口部に形成された三角州が広がっている。この三角州周辺が、古代から中世にかけての要港である朝妻湊跡に比定されているが、近年の研究成果からは朝妻湊をこの位置に比定することは難しいことが指摘される〔太田2018〕。周辺に目を移すと、湖岸部には北近江の戦国大名・浅井氏の家臣である新庄氏の居館である朝妻城跡や、中世の遺物散布地である朝妻遺跡などがあり、湖底・湖岸遺跡が集中する地域と言える（第１図）。

また朝妻沖湖底遺跡及びその沖合では、滋賀県立大学林博通研究室（当時）と京都大学防災研究所、大阪市立大学との学際的研究が行われている。この中で、沖合約250ｍ、水深約4.1ｍの地点において、文政２年（1819）６月の地震で生じた地すべりにより湖底に沈んだ石垣等と考えられる石材群が確認され、湖底・湖岸部の地質学的調査によっても、地すべり痕跡が確認されている〔林・釜井・原口2012〕



第１図　遺跡位置図

２．調査の体制と経過

本調査は、米原市と中川が共同の調査主体者となり実施したもので、さらに研究協力として滋賀県立大学考古学研究室の学生が参加している。当遺跡は先述の通り周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲外であるが、滋賀県文化財保護課の指示により、文化財保護法第99条１項に基づく滋賀県知事宛調査着手の報告（令和４年９月16日付）および、調査結果の報告（令和４年10月３日）を行っている。なお、現地調査は当初、９月17～20日を予定していたが、荒天のため22～25日に延期して実施した。

遺物については、令和４年９月５日に行った滋賀県文化財保護課との事前打ち合わせにおいて『法的手続きおよび報告の実施が担保されているのであれば、考古学調査の一連の作業であり問題ない』旨の回答を受けており、位置記録の作成と記録写真撮影を行った上で取り上げを行った。その後、遺失物法

第13条に基づき、米原警察署長宛に埋蔵物発見届を、また同様に滋賀県知事宛に埋蔵物保管証を提出している（令和４年10月３日）。これら遺物は、整理期間中は滋賀県立大学考古学研究室で一次保管し、その後は米原市教育委員会で保管している。

なお調査の実施にあたっては、広く市民に情報を発信するため、米原市のケーブルテレビによる市政番組『伊吹山テレビ』による取材・番組制作を行っている[1]。

３．調査の状況

調査は令和３年度で７年目となる。現地は沖合100ｍ付近まで、標高82.5～84.0ｍ前後（水深0.37～1.87ｍ）の遠浅な環境が広がっている。測量図上では起伏に富んだ湖底地形が広がっており、複雑な様相を呈していることが分かる（第２図）。

これまでの調査では、７世紀以降の須恵器や、９～10世紀代の灰釉陶器、11～13世紀代の中世陶器・土師器等の遺物群が確認され、本調査はそれら遺物の広がりを把握することを目的に実施している。

調査ではシュノーケリングを主体に、作業内容に応じて部分的にスキューバダイビングを行い、湖底面の分布調査を行っている。湖底にはあらかじめ図面上で設定した東西50ｍ×南北15ｍのグリッドを設定した上で、ラインサーチによる悉皆的な遺物散布状況の把握を進めた。遺物位置の記録は、湖底のグリッドに従い100分の１スケールの散布図を作成したものと、平板測量によってグリッドそのものを記録した500分の１スケールの図面を作成し、それらと周辺地形図とを合成している（第２図）。なお、第２図に示した遺物番号は、本報告の掲載番号と一致する。

４．遺物について

（１）遺物の概要

調査では過年度と同様に、８世紀代の須恵器から13世紀代の中世陶器を中心とした遺物が51点確認された（第３～５図）（第１表）。遺物の年代観については、田辺昭三〔田辺1981〕、森隆〔森1986〕、愛知県史編さん委員会〔同2012〕、愛知県史編さん委員会2015〔同2015〕、平尾政幸〔平尾2019〕、佐藤亜聖〔佐藤2022〕、中野晴久〔中野2022〕、山本智子〔山本智2022〕、山本信夫〔山本信2022〕の各論考に拠っている。

（２）須恵器

１は有台杯である。底部付近の小片で、やや高くバチ形に開く高台を張り付け、腰部には回転ヘラ削りを施す。底部外面もヘラ削り調整である。在地窯の８世紀代の遺物だろう。２は瓶類の底部で、やや小型の長頸瓶と考えられる。緻密な胎土を用い、高台貼り付け後、腰部および底部にはやや強いナデ調整を施す。猿投窯のNN－32号窯式期からＯ－10号窯式期の遺物だろう。３は短頸壺の底部である。全体に摩滅が進み、湖成鉄が付着する。内面は指オサエが多用され、全体に凹凸が目立つ。底部は糸切痕をナデ調整で消している。猿投窯のNN－32号窯式期からＫ－14号窯式期の遺物だろう。

４～７は壺甕類の体部片である。いずれも内面の同心円当て具痕が明瞭に残ることから、在地窯の遺物と考えられる。４は外面に平行タタキを斜方向に重ねる。５は外面に平行タタキを行う。６は外面に平行タタキを直角方向に重ねる。７は全体にやや摩滅が強いが、外面に平行タタキを行う。

（３）緑釉陶器

８は底部片で、断面形が逆台形に近い高台を貼り付ける。底部の糸切痕は完全にナデ消される。内外面共に緑釉を施すが、摩滅により剥離が著しい。素地部分は明灰白色を呈し、陰刻花文は施されない。猿投窯のＫ－90号窯式期頃の遺物だろうか。

（４）灰釉陶器

９は椀Ａの底部である。底部は回転ヘラ削り後未調整で、高台は退化傾向の顕著な三日月高台である。焼成はやや甘い。東濃窯の虎渓山１号窯式期の遺物だろう。10は椀として図化したが、皿の可能性もある。回転ナデ後、外面下部には回転ヘラ削り調整を施す。猿投窯のＫ－90号窯式期からＯ－53号窯式期の遺物だろう。11は輪花広縁段皿である。底部は糸切後未調整で、高台は低く逆台形状を呈する。口縁端部では、外面から内側に向かい小さな輪花を施す。内面は体部半ほどまで灰釉を漬け掛けするが、外面では藻類の付着により確認できない。東濃窯の丸石２号窯式期の遺物だろう。12は椀Ｂである。緻密な胎土を用い堅緻に焼成される。底部は回転ナデ調整により糸切痕を完全に消す。高台はやや外反する逆三角形の高いものを貼り付ける。東濃窯の明和27号窯式期の遺物だろう。13も椀Ｂだが、

0
S=1/2,000
100 m
県道能登川長浜線
朝妻公園
朝妻港跡碑
史蹟朝妻港跡碑
朝妻港跡碑
歌碑
天野川河溜
M.N
凡例
：令和４年度調査で設定したグリッド
▲：令和４年度調査資料
●：既報告資料
◆：林研究室調査資料
※トーンの範囲は、基準水位（T.P.+84.371m）時における水位を示す

第２図　遺物分布図

12と比べやや大ぶりな高台を貼り付ける。また、高台には少量の籾圧痕が確認できる。底部はナデ調整を施すが、糸切跡は完全には消えていない。猿投窯の百代寺窯式期の遺物だろう。

（5）中世陶器（碗・皿）

14～20は猿投窯もしくは常滑窯のいわゆる山茶碗である。14は底部の小片である。底部は糸切後ナデ調整を施す。高台は小型化傾向の強い断面逆三角形状のものを貼り付けるが、大半が剥離している。尾張型4型式期の遺物である。15は底部の大半と体部の一部が残る。底部は切後未調整で、高台は断面逆三角形を呈するが、小型化傾向が顕著である。尾張型5型式期の遺物である。16は底部の大半と体部の一部が残る。底部は糸切後にナデ調整を施し、断面逆三角形を呈する高台を貼り付ける。尾張型4型式期の遺物である。17は底部から体部にかけての小片だが、胎土は緻密で、堅く焼き締まる。高台はやや偏平化が進んだ逆三角形を呈する。尾張型3～4型式期の遺物である。18は底部から体部にかけての小片だが、全体に強く摩滅を受ける。底部は糸切後にナデ調整を施した可能性があるが、詳細な観察は困難である。高台は小型化傾向が著しい。尾張型6型式期の遺物である。19は底部から体部にかけての小片だが、全体に強く摩滅を受け、シー・グラス状になっている。高台は剥離している。尾張型4型式期の遺物か。20は体部の小片である。21は鉢である。底部から体部にかけての小片で、高台はやや偏平な断面逆三角形を呈する。常滑窯の2型式の遺物か。22は三筋壺である。体部の小片だが、特徴的な二重の圏線が2段にわたり確認できる。胎土は緻密で、上半部には灰釉を漬け掛けしている。猿投窯の12世紀代の遺物である。23は東播系須恵器の鉢である。口縁部の面は器壁に対し外反し、端部は上方に突出する。器壁はやや薄手に作り、外面底体部の境界の稜は明瞭である。12世紀末から13世紀初頭にかけての遺物だろう。24は丸皿である。底部の中心部を除き、灰釉を施す。瀬戸美濃の大窯第3段階前後の遺物だろう。

（6）土師器

25～29は皿である。25は底部付近の小片で、全体をナデ調整で作る。26は口縁部から体部にかけての小片だが、口縁付近に強いナデ調整をおこない、やや強く屈曲させる。5B段階前後の遺物か。27は口縁部付近の小片だが、内外面ともに強く摩滅する。28・29は湖底遺跡の表採資料としては、遺存状況が比較的良好な遺物である。28は底部から口縁部が残るが、口縁部はわずかに外反し、底部は焼成時に変形し接地しない。また内面には黒色の付着物を認める。4B段階前後の遺物だろう。29も底部から口縁部が残る。口縁部はやや内傾気味に立ち上がり、口縁断面は丸みを帯びた三角形状を呈する。また内面及び断面に、湖成鉄がやや厚く付着する。5B段階前後の遺物だろう。30は高台であるが、本来の器形は判然としない。全体をナデ調整で作るが、外面にはわずかに黒色の付着物が確認され、本来は瓦器や黒色土器であった可能性もある。

（7）黒色土器

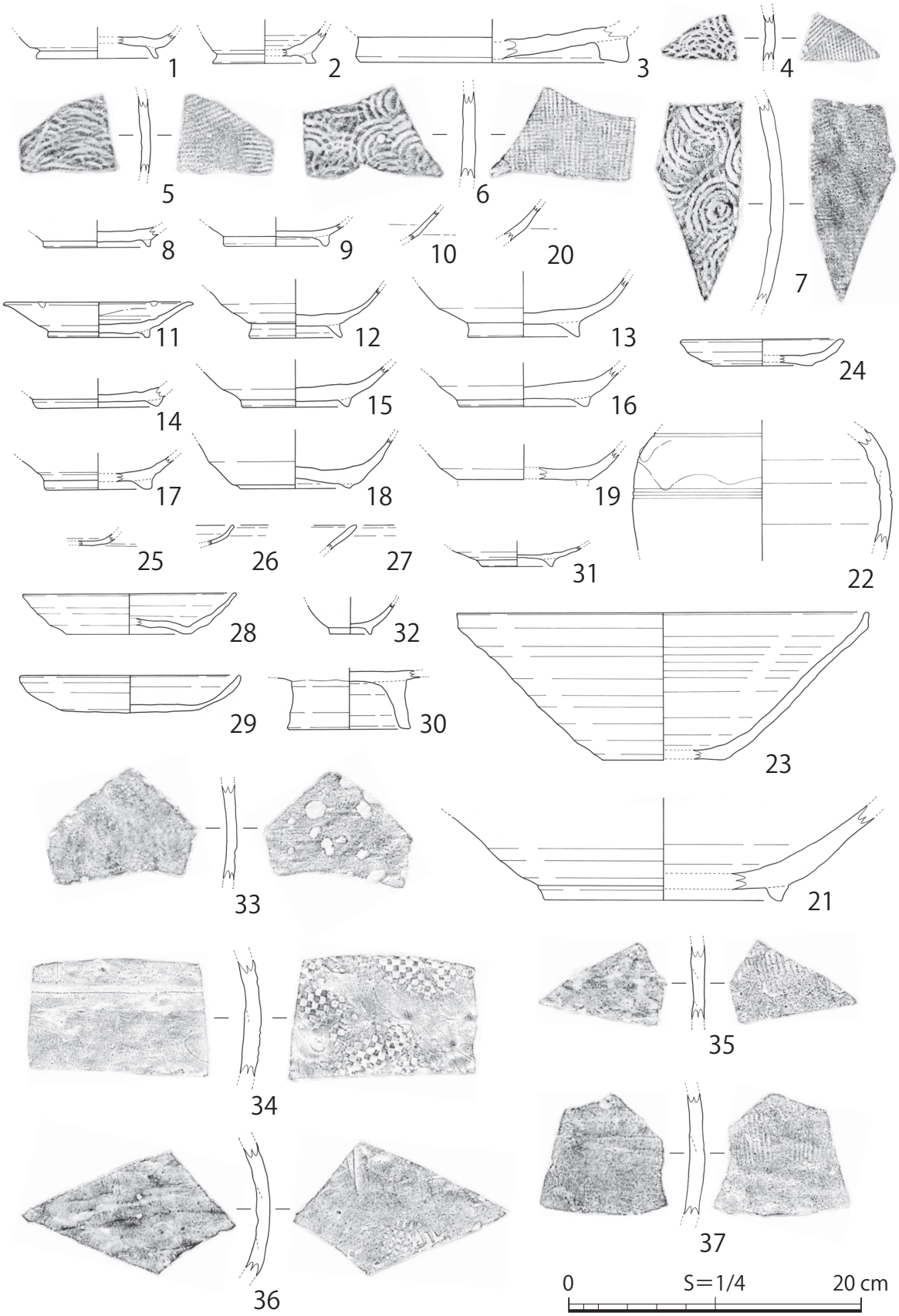
31は黒色土器の椀である。底部付近の小片で、外面は炭素が付着し黒化している。内面も同様と考えられるが、摩滅のため詳細は不明である。12世紀代の遺物と考えて大過ないだろう。

（8）磁器

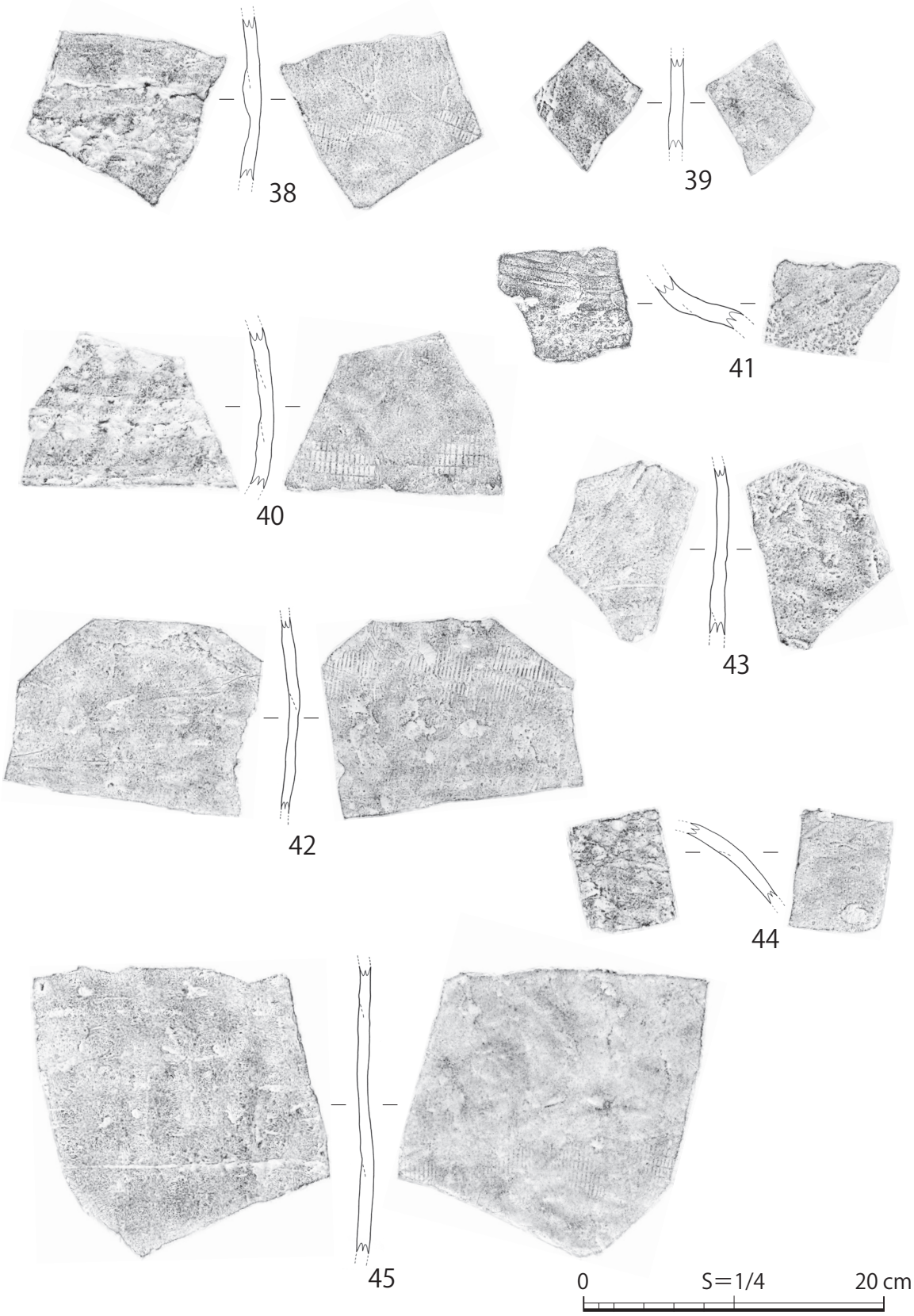
32は磁器の小碗である。内外面共に、絵付け等は認められない。近世後期から近代にかけての遺物だろう。

（9）中世陶器（壺・甕）

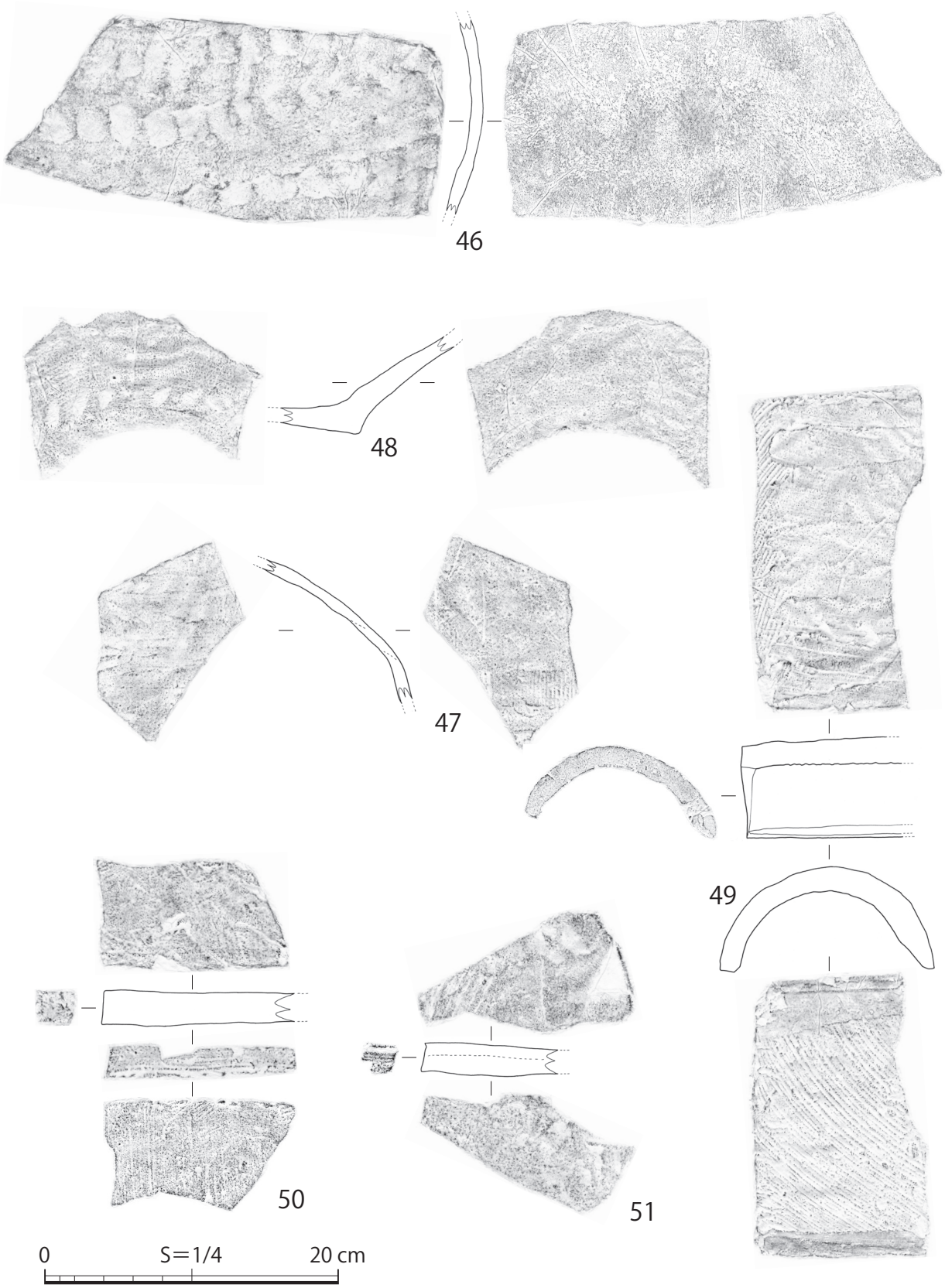
33は産地不明の体部片である。外面は横方向のハケ調整を施し、内面はナデ調整である。全体に摩滅が強く、また外面は焼成時に破裂が生じている。34は砂質が強く灰色を呈する器壁の体部片である。外面には四角形の角同士を連続させた押印を施し、薄く自然釉がかかる。内面はナデ調整だが、単位が明瞭であることからなめし皮等を用いたと考えられる。胎土や色調、釉調は渥美窯の製品と近似する。12世紀代の遺物である。35～48は常滑窯の遺物で、いずれも中世前期の遺物である。35は、外面に縦線を基調として二条の横線を組み合わせた押印を施す。36は、外面に方形と逆「く」字を組み合わせた押印を施す。37は、外面に縦線を基調とした押印を施し、内面は丁寧なナデ調整を施す。38は、外面に縦線を基調として二条の横線を組み合わせた押印を施す。内面は粘土紐および指オサエの痕跡が明瞭である。39は、内外面共にナデ調整


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
20
11
12
13
24
14
15
16
17
18
19
22
25
26
27
31
28
32
29
30
23
33
21
34
35
36
37
0
S=1/4
20 cm

第３図　遺物実測図①



第4図　遺物実測図②

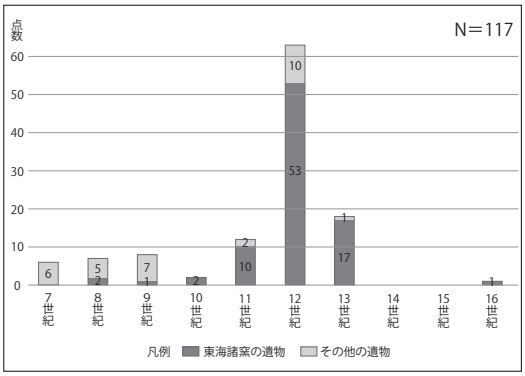


第5図　遺物実測図③

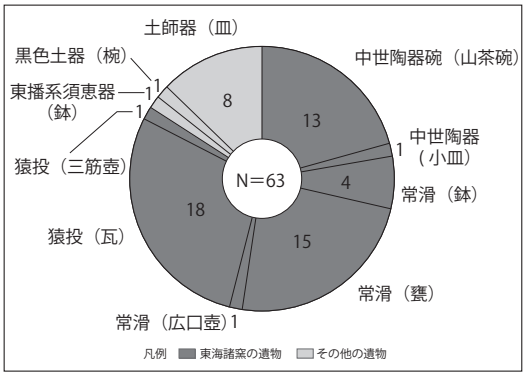
であり、外面の押印は認められない。40は、外面に縦線文を基調として横方向に三条の横線を組み合わせた押印を施す。内面は粘土紐の痕跡および、指オサエの痕跡が明瞭である。41は、頸部付近の破片で、外面には降灰が認められる。42は、外面に縦線文を基調として「＜」状の形を組み合わせた押印を施す。内面はナデ調整のほか、横ハケ状の調整を行い、一部にやや厚い湖成鉄が付着する。43は、外面に縦線文を基調とした押印を施し、内面では一部をナデ上げる。44は、肩部付近の破片で、外面は自然釉が付着し、一部は焼成時に破裂が生じている。45は、外面に縦線文を基調に四条の横線を組み合わせた押印を施す。内面は粘土紐の痕跡が明瞭である。46は、外面は縦線を基調に二条の横線を組み合わせた押印を施し、内面は指オサエの痕跡が明瞭である。47は肩部付近の破片で、外面上半部には自然釉が付着する。押印は縦線を基調に二条の横線を組み合わせたものである。48は底部付近の破片で、外面にはなめし皮状の原体による上方向のナデ調整を、内面は同様に横方向のナデ調整を施す。また内面の屈曲部やや上方には指オサエの痕跡が明瞭である。

（10）中世陶器（瓦）

49～51は瓦である。いずれも堅緻に焼き締まり、12世紀の尾張産（猿投窯または常滑窯）と考えられる遺物である。49は丸瓦である。凹面には斜め方向の糸切痕が明瞭に残り、一部に布目状の痕跡を認める。端部付近では板状原体による面取り及びナデ調整を２～３単位にわたり施す。凸面は端部に糸切痕が残るが、大半の部分で板状原体により幅1.5～3.0cm 程度の面取りをタテ方向に施す。また側面は糸切後にナデ調整を行い、形を整えている。なお当遺跡で確認される瓦は、湖底表採資料という性質上、大部分が藻類に覆われている。そうした中、当資料は大部分が比較的近年まで湖底に埋没していたと推定され、中世猿投窯に特徴的な明褐色の色調が観察できる点で貴重である。50は平瓦である。凹凸面ともに糸切痕が残るが、ナデ消され不明瞭な部分がある。側面は板状原体による面取りを行っている。51も平瓦で、調整は50と同様である。なお当資料は、断面・平面観察により製作過程で粘土を継ぎ足した痕跡が明瞭である。



第６図　遺物の所属年代



第７図　12世紀代の遺物組成

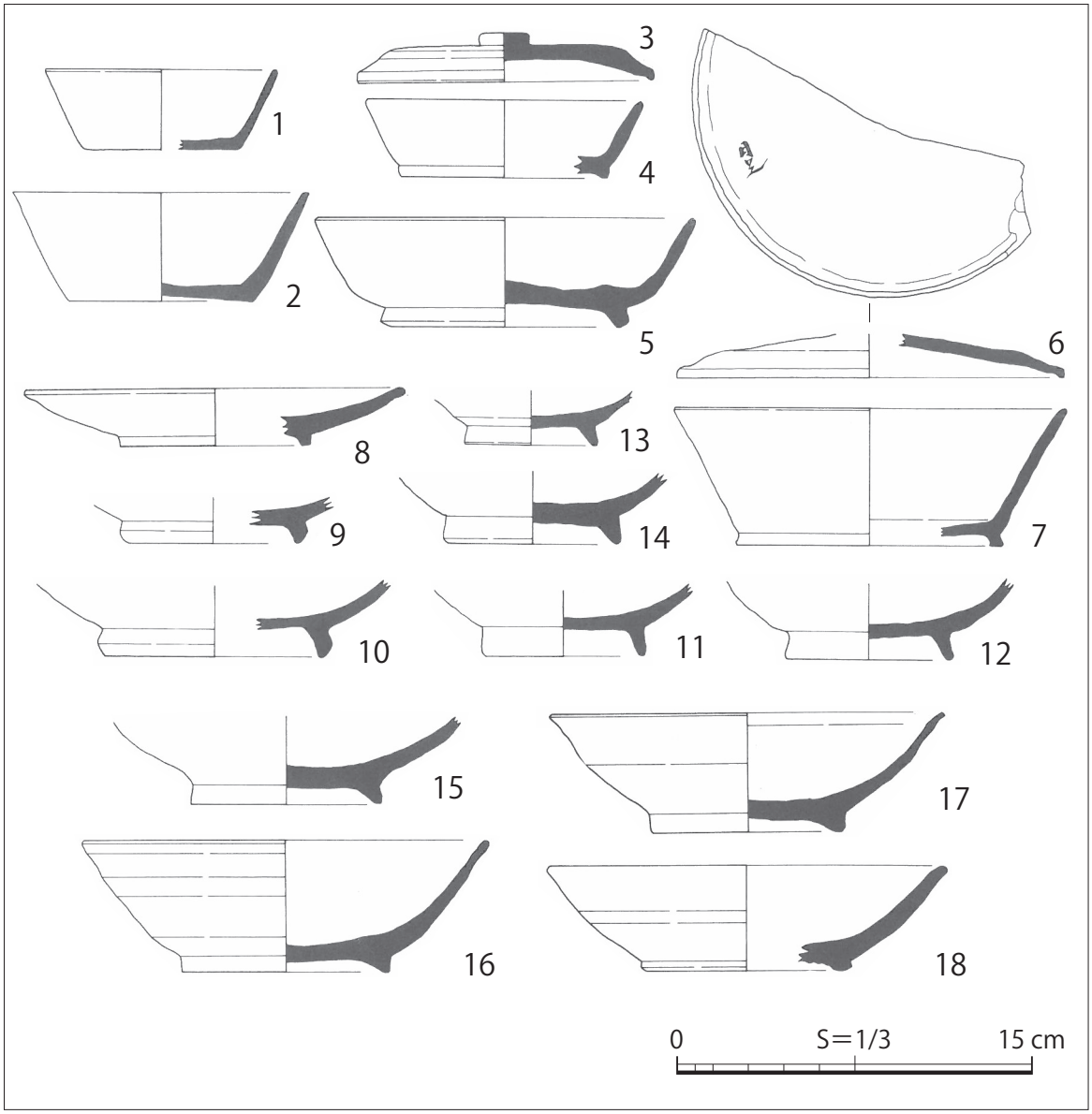
（11）小結

シュノーケリング主体による分布調査という限られた方法ではあるが、今回も多くの遺物を確認することができた。遺物の年代については既報告とほぼ同様であり、これまでの調査成果を補強する内容と言えよう。また遺物の産地として、従来は確認されていなかった東播磨地域や東三河地域の存在が浮かび上がったきたことは重要であろう。

次節ではこれら成果から、遺跡の性格について若干の検討を行いたい。

５．遺跡の画期と消長について

当遺跡の性格を検討するための方法として、遺物の年代と中心時期の組成について示したのが、第６・７図である。このうち第６図は、確認された遺物の年代を、主に推定される所属年代の下限を基準にグラフとしたものである[2・3]。大局的な動向として、遺物は７世紀以降に出現するが、多くは須恵器



第８図　筑摩御厨跡遺跡出土遺物

の壺甕類の体部であり、ほかには無台坏や瑤がある。

８世紀には、須恵器の杯や瓶、短頸壺、甕などが少量出土するが、これらの年代は猿投窯産の遺物からおおむね８世紀後半以降と考えられる。よって前段階とは実年代にして最大で100年前後の隔たりがあると推定される。

９世紀は引き続き、猿投窯産の灰釉陶器の椀や皿が少量ながら出現し、同様の状況は10世紀以降も継続している。遺物量は決して多くはないものの、搬入遺物が継続して確認され続けている状況は、集散地としての性質、つまり朝妻湊に関連づいた活動が、遅くともこの頃には周辺のいずれかの場所で始まっていた可能性を示唆するものであろう。

こうした状況が顕著になるのが、11世紀以降のことである。一見して明らかな通り、12世紀には遺物量が飛躍的に増加するが、既に11世紀には灰釉陶器や中世陶器の椀（碗）・皿など、一連の尾張・東濃産窯業製品が主体を占めており、画期は11世紀に求めるべきだろう。これら窯業製品の組成としては、第７図に示した通り、12世紀には中世陶器の瓦や三筋壺に代表される特殊品が卓越し、加えてそれらの流通コンテナとしての役割が推定される常

滑窯産の大甕も同様である[4]。この様に遺物が増加する背景には、既報告でも述べた通り、太田浩司氏は10世紀以降の天野川は現在より南流し、その旧流路が内湖を形成し、周辺に湊が形成されていた可能性を指摘している〔太田2018〕。朝妻沖湖底遺跡は、その旧流路の推定河口部にあたることから、湊に関連する施設や積み荷の選別、あるいは船舶の沈没といった出来事を主たる経緯として、現在の湖底に遺物散布地が形成されたと考えることが、現段階では妥当であろう〔中川・大西2021〕。翻って言えば、遺物量の少ない８～10世紀代の状況は、旧内湖から流下した河川の河口部が「朝妻沖湖底遺跡」付近とは異なる位置であったなど、湊の立地や構造に変化があった可能性も指摘できよう。ただし、こうした古湊周辺の環境の変化やその要因を理解するためには、琵琶湖の水位変動に代表される古環境の変動や、周辺遺跡の動向など、自然的・社会的な要因について検討を進める必要がある。

12世紀にピークを迎えた遺物量は、13世紀には一転して減少に転じる。作業手続き上の問題として、中世陶器碗・皿の尾張型５型式を一律に12世紀としてカウントしている性格上、実態以上に遺物が12世紀に偏って見えている可能性があるものの、確実に６型式に降る遺物は僅少で、加えて７型式以降の遺物は認められないため、当遺跡は13世紀の比較的早い段階で一旦終焉を迎える。

なお、16世紀には大窯第３段階の丸皿が１点のみ確認される。この母体遺跡にいては現段階では明らかにできないが、近接した湖岸部には新庄氏の居館である朝妻城跡の存在が知られており（第１図）、こうした新たな地域展開との関係性を想起させる。

以上のように、朝妻沖湖底遺跡の周辺には、遅くとも８世紀以降、近江湖東地域に猿投窯を始めとする東海地方の窯業製品が搬入される状況が成立していた可能性が高い。あるいはそれは、はるか縄文時代以前から、東国と西国を結ぶ結節点としての米原市域の地理的特性による、必然的な現象であっただろう。湊の中心地や琵琶湖との関係は、自然的また社会的・政治的な環境変化によって画期を生じ、変動するものであったと考えられるが、そうした沿革の中で、遅くとも11世紀から13世紀始め頃にかけての朝妻湊が天野川旧流路の内湖部分に成立し、「朝妻沖湖底遺跡」も形成されたと考えられる。

６．筑摩御厨跡遺跡について

（１）本章の目的

朝妻沖湖底遺跡を考察する上で、欠くことができないのが筑摩御厨跡遺跡の存在である。筑摩御厨跡遺跡は朝妻沖湖底遺跡の南方約１㎞に立地する湖岸遺跡であり、米原町教育委員会（当時）により発掘調査が行われている〔米原町教育委員会1986〕。ここでは両遺跡の類似点および相違点について概観し、朝妻沖湖底遺跡を理解するための一助としたい。

（２）筑摩御厨について

御厨とは、古代・中世において、皇室の供御や神社の神饌を調進した皇室・神社所属の領地を指す。近江には、筑摩のほかにも勢多や和邇にも御厨が設けられており、いずれも都への運搬が簡単な水辺に位置していた。筑摩御厨の詳しい創設時期は明らかではないが、最も古い史料としては延歴十九年（800）五月十五日付太政官符（「類聚三大格」所集）に記載がある。さらに発掘調査調査を担当した中井均氏は、天平勝宝八年（756）五月の太政官符に、奈良時代以前より貢進してきた国として近江国があることから、先の勢多や和邇の御厨と共に、奈良時代まで成立が遡る可能性を指摘している。また御厨の廃止については、『扶桑略記』延久二年（1070）二月十四日条に記載があり、後三条天皇が勅旨をもって筑摩御厨を停止している〔米原町教育委員会1986〕。

（３）筑摩御厨跡遺跡の出土遺物について（第８図）

調査では遺構は確認されなかったものの、遺物包含層から須恵器や土師器、灰釉陶器や中世陶器、黒色土器などの遺物が出土している。このうち、須恵器には６世紀後半～７世紀前半代の坏身があるがこれは客体的であり、多くは８世紀末～12世紀頃の遺物と報告される。また刀子や雁股鏃などの金属製品や、皇朝十二銭の一つである神功開寶、さらに木製品が出土している。生産地等についての詳細な検討は今後の資料調査を進める必要があるが、以下では朝妻沖湖底遺跡の年代との大局的な比較を行うため、須恵器・灰釉陶器・中世陶器の供膳形態について、報告書を基に概要を整理したい。

①須恵器

杯には無台坏と有台坏があり（１～７）、８～９世紀代の遺物と報告される。このうち無台坏は、朝

妻沖湖底遺跡においては確認されていない。有台坏には器高の高いもの（７）と、扁平なもの（４・５）がある。また身・蓋いずれにも、「月足」と墨書されたものがある。

②灰釉陶器

灰釉陶器は、須恵器の段階から継続して出土する。古いものには９世紀前半のＫ－14号窯式期と考えられる皿（８）があり、それ以降、10世紀後半までの各段階と考えられる椀Ａ類（９・10）や、10世紀後半代と考えられる深椀（11・12）、11世紀以降と考えられる椀Ｂ（13・14）がある、

③中世陶器

尾張型３～５型式と考えられる遺物が出土するが（15～18）、いずれも碗であり、小碗や小皿は認められない。なお、朝妻沖湖底遺跡で多数確認される瓦や常滑窯の甕は少数が出土するのみである。

（４）朝妻沖湖底遺跡との共通点と差異

以上のように、筑摩御厨跡遺跡では８～13世紀にかけての遺物が継続的に出土しており、朝妻沖湖底遺跡と共通している。ただし時代毎の様相には差異があり、例えば朝妻沖湖底遺跡では８世紀代の遺物が少ないのに比べ、筑摩御厨跡遺跡では遺跡の中心時期の１つとなっているように見受けられる。また朝妻沖湖底遺跡を特徴づける中世陶器の瓦や常滑窯の甕は筑摩御厨跡遺跡では非常に少ない。こうした差異は、両遺跡のもつ御厨や湊という特徴的な性格を反映した可能性が高いが、御厨停止後も筑摩御厨跡遺跡で継続的に遺物が確認され、その頃から朝妻沖湖底遺跡の遺物量が飛躍的に増加することは興味深い。今後、地理的に近い位置に所在する公的施設・集散地という両遺跡を一体的に検討することで、御厨から湊へ運ばれた供御や神饌、あるいは東山道を通じた緒地域の物資集積と湊への運搬とった関係性について、検討を深めることができるだろう

おわりに

以上が令和３年度調査の概要である。詳細については既に述べた通りだが、最後に本調査を踏まえた、地方自治体における水中遺跡の取り組みについて述べてまとめにかえたい。

鷹島神崎遺跡（長崎県松浦市）における元寇船の発見と史跡指定を契機とした日本における水中考古学の展開は、令和４年３月の『水中遺跡ハンドブック』の発行をもって、大きな画期を迎えたと言える。それはすなわち、陸上の遺跡保護の体制や調査と同様の取り組み方を、水中でも同様に進めるという基本的な考え方と具体的な実践の手法が示されたことである〔文化庁文化財第二課2022〕。

この実現にあたっては、大きなハードルがある。歴史的な経緯から、一般に「水中考古学の先進地」と認識されている滋賀県ですら、当遺跡のように未だ周知の埋蔵文化財包蔵地となっていない遺跡の存在が多数予想されるものの、調査技術やマンパワーは明らかに不足している。こうした問題は全国に通有と言えるが、洋上風力発電に代表される新時代の開発が加速度的に進行する社会情勢にあって、遺跡が未周知であることは、遺跡の滅失に直結しかねない。

こうした問題を解決するために、上述のハンドブックにおいては「さまざまな知識や技術・経験を有する機関や個人との協力・連携関係の構築」「水中遺跡の調査・研究に取り組む団体や各種分野の専門家との情報共有」の必要性が示されている。そうした中、本調査は自治体と研究者、さらに大学が連携し、継続的な取り組みにより遺跡の範囲や性格を解明しようと試みるものである。これは期せずして、ハンドブックの指針を先取りした、全国的に貴重な取り組みと言えよう。無論これらは、陸上の遺跡の調査においては、全国的に当たり前の取り組みでもある。

自治体の行政的使命と研究者による地域史の解明、さらには将来を担う若手の育成という多岐にわたる課題の解決を目指す上で、本調査においては裾野の広い取り組みを継続し、時代に即した現実的な調査研究体制の在り方についての『米原モデル』構築を目指していきたい。

註

１．『伊吹山テレビ2022年10月21日号』にて放送。現在は『米原市役所 YouTube チャンネル Maibara city official Channel』にて配信している。【https://www.youtube.com/watch?v=BR3h9Y0U4qs&t=3s】

２．グラフは本稿および既報告で扱った遺物を基に作成した〔滋賀県立大学林博通研究室2004〕〔中川・大

西2021〕。ただし〔中川・大西2021〕では、湖底から取り上げを行っていない遺物について観察表で報告しているが、それらは対象とはしていない。これは、現在では遺物を実際に確認することができないため、第三者は言うに及ばず、筆者すら再検証を行うことができないという、学問としての問題点によるものである。

3．常滑窯の甕は、数多く確認される資料の大半が体部片であり、年代指標となる口縁部や胴部などが少ない。このため生産地の状況や、同様に主要な尾張産窯業製品である中世陶器碗・皿類の年代比率を基に、12・13世紀に按分している。また、須恵器の壺甕類の体部片についても、同様に7～9世紀に按分している。

4．当遺跡を集散地と考えるにあたり、近江湖東・湖北地方における日常雑器として、尾張産窯業製品が多用されていたという実態には十分に留意すべきである。ただし、それら遺物が近江地域にもたらされるには、東山道・東海道のいずれかを通らざるをえず、特に重量物である瓦を運ぶために険しい鈴鹿越えを選ぶ選択肢は蓋然性に乏しい。東濃窯の遺物が一定数確認されることや、加えて東海道を経由した場合、猿投窯産の瓦の消費地としての米原市域を想定しなくてはならないが、現段階ではその可能性を見出すことは困難である。中世陶器碗・皿の一定数が遺跡周辺での生活に用いられていた可能性は十分に想定されるが、それは同時に、湊の機能を支えた人々に関連した遺物であると現段階ではとらえている。

■謝辞

本稿の執筆にあたり、以下の諸氏のご協力を賜りました。末筆となり恐縮ですが、記して感謝申し上げます（順不同・敬称略）。

大西遼、梶原義実、片桐妃奈子、金宇大、佐藤亜聖、清水俊輝、永井邦仁、贄元洋、増山禎之

■調査参加者（学年は令和３年度のもの）

中川永（豊橋市美術博物館）、石田雄士（米原市教育委員会）、島田章広（伊豆の国市教育委員会）、小林風雅（滋賀県立大学博士前期課程１回生）、森田遥（滋賀県立大学４回生）、岡田朋恵（同３回生）、加藤凛・西村空（同２回生）、中村優月・仲村心海・柚木重敬（同１回生）

■参考文献

・田辺昭三1981『須恵器大成』角川書店
・米原町教育委員会1986「筑摩湖岸遺跡発掘調査報告書」『米原町埋蔵文化財調査報告書』５
・森隆1986「滋賀県における古代末・中世土器」『中世土器の基礎研究』Ⅱ 日本中世土器研究会
・滋賀県立大学林博通研究室2004『尚江千軒遺跡　琵琶湖湖底遺跡の調査・研究』滋賀県立大学人間文化学部　林博通研究室
・愛知県史編さん委員会2012『愛知県史　別編　窯業３　中世・近世　常滑系』愛知県史編さん委員会
・林博通・釜井俊孝・原口強2012『地震で沈んだ湖底の村　琵琶湖湖底遺跡を科学する』サンライズ出版
・愛知県史編さん委員会2015『愛知県史　別編　窯業１　古代　猿投系』愛知県史編さん委員会
・太田浩司2018『湖の城・舟・湊　琵琶湖が創った近江の歴史』サンライズ出版
・平尾政幸2019「土師器再考」『洛史』研究紀要　第12号　公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所
・中川永・大西遼「「朝妻沖湖底遺跡」の調査成果と基礎的検討」『人間文化』50号　滋賀県立大学人間文化学部
・佐藤亜聖2022「東播系須恵器」『新版　概説　中世の土器・陶磁器』日本中世土器研究会
・中野晴久2022「東海諸窯」『新版　概説　中世の土器・陶磁器』日本中世土器研究会
・文化庁文化財第二課2022『水中遺跡ハンドブック』
・山本智子2022「山茶碗」『新版　概説　中世の土器・陶磁器』日本中世土器研究会
・山本信夫2022「中世前期の貿易陶磁器」『新版　概説　中世の土器・陶磁器』日本中世土器研究会

■図の出典

・第１図：滋賀県教育委員会2017『滋賀県遺跡地図』滋賀県教育委員会事務局文化財保護課　より引用し加筆して作成
・第２図：〔滋賀県立大学林博通研究室編2004〕より引用し加筆して作成
・第８図：〔米原町教育委員会1986〕より引用して作成。

第1表　遺物観察表

No	器種	器形	部位	胎土	色調	口径／長さ	底径／幅	器高	焼成	産地	年代・型式等	調整ほか
1	須恵器	有台杯	底部～体部	やや粗	灰	－	(8.4)	(1.7)	良好	在地窯か	8世紀代	回転ナデ、腰部・底部外面回転ヘラ削り
2	須恵器	長頸瓶か	底部	密	灰	－	(6.9)	(2.3)	良好	猿投窯	NN－32～O－10号窯式	回転ナデ
3	須恵器	短頸壺	底部	密	茶褐	－	(18.6)	(2.4)	良好	猿投窯	NN－32～K－14号窯式	ナデ、指オサエ、底部糸切後ナデ調整、湖成鉄
4	須恵器	壺甕類	体部	密	灰	－	－	(3.2)	良好	在地窯か	－	外面並行タタキ、内面同心円当て具
5	須恵器	壺甕類	体部	密	灰	－	－	(5.0)	良好	在地窯か	－	外面並行タタキ、内面同心円当て具
6	須恵器	壺甕類	体部	密	灰白	－	－	(5.9)	良好	在地窯か	－	外面並行タタキ、内面同心円当て具
7	須恵器	壺甕類	体部	密	暗灰	－	－	(14.0)	良好	在地窯か	－	外面並行タタキ、内面同心円当て具、全体に摩滅強い
8	緑釉陶器	椀か	底部	密	明灰白	－	(7.3)	(1.3)	良好	猿投窯か	K-90号窯式頃か	回転ナデ、緑釉
9	灰釉陶器	椀A	底部	密	褐灰	－	6.9	(1.5)	やや甘	東濃窯	虎渓山1号窯式	回転ナデ、底部ヘラ削り後未調整
10	灰釉陶器	椀か	体部	密	灰白	－	－	(2.0)	良好	猿投窯	K－90～O－53窯式	回転ナデ、体部下半に回転ヘラ削り
11	灰釉陶器	輪花広縁段皿	底部～口縁部	密	灰白	(13.0)	6.9	2.4	良好	東濃窯	丸石2号窯式	回転ナデ、底部糸切後未調整、灰釉漬け掛け、輪花
12	灰釉陶器	椀B	底部～体部	密	灰白	－	6.2	(3.3)	良好	東濃窯	明和27号窯式	回転ナデ、底部糸切後回転ナデ調整
13	灰釉陶器	椀B	底部～体部	やや粗	褐灰	－	7.7	(4.0)	良好	猿投窯	百代寺窯式	回転ナデ、底部糸切後ナデ調整、高台に籾圧痕
14	中世陶器	碗	底部	やや粗	灰白	－	(8.2)	(1.4)	良好	猿投窯又は常滑窯	尾張型4型式	回転ナデ、底部糸切後ナデ調整
15	中世陶器	碗	底部～体部	密	灰白	－	7.3	(2.7)	良好	猿投窯又は常滑窯	尾張型5型式	回転ナデ、底部糸切後未調整
16	中世陶器	碗	底部～体部	密	褐灰	－	8.8	(2.7)	良好	猿投窯又は常滑窯	尾張型4型式	回転ナデ、底部糸切後ナデ調整
17	中世陶器	碗	底部～体部	密	暗灰	－	(7.1)	(2.2)	良好	猿投窯又は常滑窯	尾張型3～4型式	回転ナデ
18	中世陶器	碗	底部～体部	密	灰白	－	(7.4)	(3.3)	良好	猿投窯又は常滑窯	尾張型6型式	回転ナデ、底部糸切後ナデ調整か、全体に摩滅強い
19	中世陶器	碗	底部～体部	密	灰白	－	(9.0)	(2.1)	良好	猿投窯又は常滑窯	尾張型4型式か	回転ナデ、全体に摩滅強い
20	中世陶器	碗	体部	やや粗	灰白	－	－	(2.5)	良好	猿投窯又は常滑窯	－	回転ナデ
21	中世陶器	鉢	底部～体部	粗	褐灰	－	(16.2)	(6.5)	良好	常滑窯	2型式	回転ナデ
22	中世陶器	三筋壺	体部	密	灰褐	－	－	(8.3)	良好	猿投窯	12世紀代	ナデ、二重の圏線、灰釉漬け掛け
23	中世須恵器	鉢	底部～口縁部	やや粗	暗灰	(28.1)	(8.4)	10.2	やや甘	東播系	12世紀末～13世紀初頭	回転ナデ
24	中世陶器	丸皿	底部～口縁部	密	暗灰	(11.2)	(6.8)	1.8	良好	瀬戸美濃	大窯第3段階前後	回転ナデ、灰釉
25	土師器	皿	底部	密	茶褐	－	－	(0.7)	良好	－	－	ナデ
26	土師器	皿	体部～口縁部	やや粗	茶褐	－	－	(1.4)	良好	－	5B段階前後	ナデ
27	土師器	皿	口縁部	密	茶褐	－	－	(3.2)	良好	－	－	ナデ、全体に摩滅強い
28	土師器	皿	底部～口縁部	密	褐	(14.6)	(8.6)	2.3	良好	－	4B段階前後	ナデ・指オサエ、内面に黒色付着物
29	土師器	皿	底部～口縁部	密	灰白	(15.0)	－	2.5	良好	－	5B段階前後	ナデ、内面・断面に湖成鉄
30	土師器か	－	高台	密	茶褐	－	8.4	(4.0)	良好	－	－	ナデ調整、外面に黒色付着物
31	黒色土器	椀	底部	密	暗褐	－	4.8	(1.3)	良好	－	12世紀代	全体に摩滅強い
32	磁器	小碗	底部～体部	密	白	－	(2.2)	(2.8)	良好	－	近世後期～近代	ナデ
33	中世陶器	壺甕類	体部	密	褐灰	－	－	(6.5)	良好	－	－	外面横ハケ、内面ナデ、全体に摩滅強い
34	中世陶器	甕	体部	やや粗	灰	－	－	(8.1)	良好	渥美窯	12世紀代	外面押印・自然釉、内面ナデ
35	中世陶器	甕	体部	粗	茶褐	－	－	(5.1)	良好	常滑窯	中世前期	外面押印、内面ナデ
36	中世陶器	甕	体部	密	暗灰	－	－	(9.1)	良好	常滑窯	中世前期	外面押印、内面ナデ
37	中世陶器	甕	体部	密	茶褐	－	－	(8.3)	良好	常滑窯	中世前期	外面押印、内面ナデ
38	中世陶器	甕	体部	粗	茶褐	－	－	(10.8)	良好	常滑窯	中世前期	外面押印、内面ナデ・指オサエ
39	中世陶器	甕	体部	密	茶褐	－	－	(6.0)	良好	常滑窯	中世前期	内外面ナデ
40	中世陶器	甕	体部	やや粗	暗灰	－	－	(10.7)	良好	常滑窯	中世前期	外面押印、内面ナデ・指オサエ
41	中世陶器	甕	肩部	やや粗	暗灰	－	－	(3.6)	良好	常滑窯	中世前期	内外面ナデ、外面に降灰
42	中世陶器	甕	体部	やや粗	暗茶褐	－	－	(13.3)	良好	常滑窯	中世前期	外面押印、内面ナデ・横ハケ・湖成鉄
43	中世陶器	甕	体部	密	暗茶褐	－	－	(11.1)	良好	常滑窯	中世前期	外面押印、内面ナデ
44	中世陶器	甕	肩部	密	褐灰	－	－	(5.2)	良好	常滑窯	中世前期	内外面ナデ、外面に自然釉
45	中世陶器	甕	体部	粗	暗灰	－	－	(19.0)	良好	常滑窯	中世前期	外面押印、内面ナデ
46	中世陶器	甕	肩部	粗	茶褐	－	－	(13.2)	やや甘	常滑窯	中世前期	外面押印、内面ナデ・指オサエ
47	中世陶器	甕	肩部	やや粗	褐	－	－	(9.8)	良好	常滑窯	中世前期	内外面ナデ、外面に自然釉
48	中世陶器	甕	底部	やや粗	褐	－	－	(6.6)	良好	常滑窯	中世前期	外面タテ方向ナデ、内面ヨコ方向ナデ・指オサエ
49	中世陶器	丸瓦	－	密	明褐	(12.2)	14.7	(7.1)	良好	猿投窯	中世前期	凹面糸切痕跡明瞭、凸面タテ方向面取り
50	中世陶器	平瓦	－	密	灰褐	(13.1)	－	2.3	良好	猿投窯	中世前期	凹凸面共に糸切痕が残るが、一部ナデ消す、側面面取り
51	中世陶器	平瓦	－	密	灰褐	(9.4)	－	2.1	良好	猿投窯	中世前期	凹凸面共に糸切痕が残るが、一部ナデ消す、側面面取り

註1．数値の単位はセンチメートルである。　　2．表中の（　　）は、残存値もしくは復元値であることを示す。

作業の様子①（南東から撮影）

作業の様子②（北西から撮影）

2．須恵器　瓶類

6．須恵器　甕

8．緑釉陶器　椀か

11．灰釉陶器　輪花広縁段皿

12．灰釉陶器　椀 B

15．中世陶器　碗

23. 東播系須恵器　鉢

24. 中世陶器　丸皿

29. 土師器　皿

31. 黒色土器　椀

34. 中世陶器　甕（渥美窯か）

38. 中世陶器　甕（常滑窯）

46. 中世陶器　甕（常滑窯）

51. 中世陶器　瓦（猿投窯）